

機械と異人種間混交の倫理について

ルイス・チュード-ソケイ

国際的なチェスの名手で著名な人工知能（AI）の専門家として知られるデイヴィッド・レヴィが、賛否を巻き起こしたその著作『ロボットとの愛とセックス』（*Love and Sex with Robots* 2007）の中で、以下のようなタイムリーで意義深い文化とテクノロジーとの類似性について宣言している。

ロボットの産物が生物学的な生き物と大体同じようなものとして認識されるとき、社会に対するその効果は絶大なものとなる。それは今まで誰も知らなかった遠くの地から、人々がごまんとこちらに押し寄せてきたようなものとなる。それなりに我々と行動様式が似たところがあるものの、明らかに自分たちとは違う人々が。¹

著者がこのような比喩をいとも簡単に成立させてしまったことは、その著作におけるジェンダーの関係性についての仮説、またはその

¹ David Levy. *Love and Sex with Robots: The Evolution of Human-Robot Relationships*. Harper Perennial, 2007, p. 303.

関係性への影響の可能性、そして倫理への無頓着さが物議をかもしたことの影に隠れてしまったかもしれない。しかしながら、このような比喩がやすやすと、そしてもっとも気まぐれな読者層にもさらりと自然に受け入れられてしまったことについては考察に値するであろう。以下の論考のように、このような局面を通してこそ、人間と機械の関わりについての一般的論議の場において、どのようにそしてなぜ、倫理の問題そのものが中心的な論点となったかが理解できるようになるのである。

シンギュラリティの猛進

テクノロジーの歴史は、産業革命から人工頭脳学、ロボット工学からAIにいたるまで、ずっとこのような人間と機械、非白人とロボット、テクノロジーと社会的ないし文化的「他者」、といった安易な比較にさらされてきた。SFの歴史においては、このような比較を合理化して自然なものとし、人種や差異の問題—レヴィがいうセックスや移民も含めて—がこのジャンルの中心的なソフトウェアであり、そのようなナラティブを我々が消費するにあたって、すでに違和感のないものと常に思わせるような作用があった。著者にとって、ロ

ロボットを理解するための最初のテンプレートが人種、セックス、労働、移民についてである、という事実がいかに特質かを把握するのは、それがそもそも必要だったからであり重要ではない。あまりにも自然化されたことによってこれらのメタファーが現実世界に与えるインパクトは文化的にすっかり見えないものになってしまった。つまり、これこそがメタファーの論理というものだ—すなわち、すでに合理性のある点を結び付ける上で、メタファーは、それが成立する上でのそれまでの緊張感を消滅させ、なおかつ力を与え続けるのである。

ここで最も重要なのは、レヴィがセックス、人種そしてロボット工学を通じ、我々が「シンギュラリティ」と呼ぶ未来学者・科学技術者のレイ・カーツワイル[Ray Kurzweil]の言葉—機械が思考能力、そしてもしかすると社会的価値観において人間に追いつく、或いは凌駕するという黙示録的な瞬間、すなわちサミュエル・バトラーからカレル・カペックのような作家の作品に見られる、いわばSFの世界を最初に生み出した瞬間について言及していることである。これらの作者たちが、「ロボットの反逆」／「機械の覚醒」などの類型、すなわちメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン、あるいは

現代のプロメテウス』(1818) や、そこまで有名ではないがハーマン・メルヴィルの『短編集』(1856)に収録された「鐘塔」などに影響され、ジャンルを形成していく様は、まるで十九世紀の不安材料であった奴隷の反逆、植民地の抵抗への恐怖感、そして十九世紀と二十世紀における労働蜂起への恐怖から直接生み出されたようであった。

しかし我々の現在の問題として、シンギュラリティとは、英国人で黒人の理論家／アーティストであり注目を集めているアフロフューチャリストの一人であるコドウォ・イシュン[Kodwo Eshun]がいうところのフューチャーズ産業－「テクノサイエンス系フィクションのメディア、テクノロジーへの予想、市場予想という企業と企業の交差点」²－によって大方決定づけられ、生産されるのである。どのような未来を志向するかについては人種の問題が肝心であるとするイシュンの視座をとり、我々がもしこのような産業に依存したり、その産業がもたらす歪んだ未来像を不可避のものとするのをやめ、その代わりにアフロフューチャリズムという現在成長しつつある様々な視点（言説と呼ぶには未だ躊躇する）からシンギュラリティ

² Kodwo Eshun, "Further Considerations on Afrofuturism." *CR: The New Centennial Review*, 3 no. 2, Summer 2003, p. 290.

を考えてみるのはどうだろうか？ 奴隷制度と植民地主義の経験とその後を生きた黒人の人々の歴史的経験に基づく以上、企業的な未来像かもはや超越したとされる過去か、という誇張された二元論から距離を置くような終末論がそこにはあるのではないか。つまりはこういうことだ：もしすでに世は終末を迎えてしまっていたとしたら？ ミュージシャンで自称預言者のサン・ラー [Sun Ra] が言うように、もはや今は世界の終わりのあとだとしたら？ 未来について多くの人々が感じている不安—知覚を持つ機械や人工知能が、神、国家、あるいは無限に対して人間の持つ概念を矮小化させ、また喜びや自由についても我々のこれまでの知識をはるかに凌駕すると約束するような—そんな不安がデジャヴにすぎないとしたら？

このような時間に対する捉え方はどこか解放的な感じがする。それは思考を今そこにある恐怖から内在の認識へと導き、その恐怖がもたらす影響にあらかじめがんじがらめになっている状態から引き離すのである。国家主導の硬直的なテクノユートピアニズムを離れ、より馴染みがありでも非常に不安定な、文化的不安や渴望といった継続中の領域へと臨時に転置するのである。そのことによって、テクノロジーおよびその企業的未來像に関して、カーツワイラー的な

シンギュラリティが差し迫った状態はないこと、または「人間」がその「生物学的範疇」を超越してテクノロジーが人間の知能をはく奪したり、機械が人間の許容量と越えてしまうといった決定的な瞬間といったものはない、ということになる。あるいはむしろ、そのシンギュラリティには何ら特別なことはなく、すなわち終末に対する黒人の人々の反応も、あまりにも慣れてしまったが故にほぼ無関心に近いという特徴があるのだ。それは何故かというと、我々にとって世界の終わりはもう来てしまったことだからである。あの偉大な黒人の SF 作家／批評家であり、口にすることが憚られる境界を超越する欲望の理論家であるサミュエル・ディレイニー [Samuel Delany] の言葉を要約するならば、世の末はすでに過ぎ去ってしまい、我々はその灰の中ではいずりまわっているにすぎないのである。³

終末論に意味があるのは、レヴィにとっての未来が、カーツワイラーの未来やイロン・マスクあるいはいまだに西洋におけるテクノロジーの発展を担っている人々の未来像と同様に、我々がすでに経験した過去の重要な変化 — しかし長い人生の間中、身近だった故

³ See Samuel R. Delany. *Dhalgren*. Bantam Books, 1975. 邦訳：サミュエル R. ディレイニー 『ダールグレン』(1)(2) (未来の文学) 国書刊行会 2011

にそもそもの起源を忘れてしまったような変化 — の反響にしかすぎない。その変化は、我々が人間的／非人間的という境界線のどちらにいたかによって記憶がそれぞれ異なるのである。立場の差異からみれば、最初のシンギュラリティが起こった時、二つのカテゴリーの境界線がぼやけはじめ、それを可能とした社会秩序が自らの正当性をめぐる攻撃の矢面に立つことになったとき、かたや力を得て、もう片方は力を失ったのである。

アフrofューチャリズムを念頭におくならば、すなわち、機械が市民になる時（別々に／または平等に）、あるいはモノが人間となり我々の世界に移民としてやってくるという差し迫った瞬間とは、そんなに遠い昔ではない過去の焼き直しにすぎないのである。それはモノとしての地位に卑しめられた黒人の人々が、魂や知性を否定され、奴隷制度の論理によって、獣とオートマトン、動く道具（アリストテレスが奴隷をそう著したように）と黒い補綴物の間の立場から、人間と合併し、人間となった過去である。

性、人種、ロボット倫理

この歴史的な転換がカーツワイラー的なシンギュラリティと同様に、

特に人種差別問題の政治的ナラティブやその構造が差異に関する科学的な概念とともに欲望を抑制する必要性によって築かれたことが明らかになったこともあって、終末論への恐れと熱狂をもって受け入れられたことを忘れるべきではないだろう。ここでの最も重大な意義とは、合併という点とともに、ブレンド、同化、そして社会的文化的な親密といった議論が想起させる、大掛かりな性的または生殖的ミトスの数々である。これは我々がすでに経験済みのことだ。

レヴィが 2016 年に行った追加講義「ロボットと結婚すればいいのでは」[“Why Not Marry a Robot”]でまさにそのことにふれているが、そこで彼は自然のことのよう人間／機械の親密性、またそれに伴う文化へのインパクトや異人種間混交への転換に関心を寄せていくのである。⁴このことはこの数世代の「サイバー倫理」「サイボーグ・フェミニズム」や社会的タイプとしての「ロボセクシャル」の台頭からすれば驚きに値しない。人間／機械のハイブリッドを考える上で、一般的にどのようにハイブリッドが誕生するかというプロセス—つまりセックス—抜きには考えられないだろう。

⁴ David Levy. “Why Not Marry a Robot.” Goldsmiths, University of London, UK, 2016. Lecture, <https://www.youtube.com/watch?v=TI-ldfzWBfo>.

「ロボットと結婚すればいいのでは」では、人間／ロボットの結婚の正当性について、それは異人種間の結婚から導くことができ、導くべきであり、いずれ導かれることになるだろうと論じる。レヴィの論点の中核をなすのは、そのような関係が禁止されたのは、究極的には人種の違いが生物学上の地位、あるいは種族としてのあり様の違い、すなわち彼／彼女は人間ではない、あるいは合法的な人間ではない、と考えられていたからだ、という点である。そのような禁止事項—同性婚も同様だが—は、反異人種間混交法や混血婚に反対する法律がそうであったように、そのうち文化的にすたれていくだろうと論じている。このような人種の扱いは単なるメタファーではなく、または人種、ジェンダー、そして様々な他者との間でよくなされる比較のように安易なものではない。混血婚は、特に黒人が劣等とされ、最低ではモノあるいは動物、最高でもせいぜい劣性の人間と考えられていた過去のシンギュラリティの文脈の中に問題の根がある。そのシンギュラリティの結果として、混血婚は社会的・生物学的な規範の法律的・倫理的な再定義を意味したのであり、レヴィの観点からすればそれは未来永劫的に前例として機能することを意味した。

レヴィの考え方はこれよりさらに特異的であり、歴史的にも概念的にも入り組んだ、人種、性、そして機械の様々な問題をときほぐすことがより一層難しくなっていることを理解するのに有用となる。彼の目的は、愛するという人間の権利を神格化することでも愛を「人間」の一次的な特徴とすることだけではなく、ロボットの選ぶ権利—正確には、選ぶのでないとしても拒否しないという権利の保護と確立なのである。「人間性」はここでは問題ではない。関係こそが親密性を決定するものであり、社会的認知を要求するものなのである。親密性こそ人間らしさの主張を生み出す。親密性こそ全てにおいて何よりも倫理的であり、また変化をもたらすものであり、それが現実へともたらす影響の振幅こそ、欲望を通じて社会的、生物学的な規範を揺るがし再定義するのである（すなわち私の愛によって—そして合法的にそれを表明する力があることによって—この「モノ」が人間となる。このことは我々がより歴史的に合意できることの言い換えにすぎない、という点に留意すべきだろう。つまり、私の軽蔑によって—そして合法的にそれを表明する力があることによって—この人間が「モノ」となる、ということである）。

このような数々の議論はレヴィが思うほどにはロボット工学に焦点を絞ってはいないものの、それを論拠としているのは明らかだ。それは「人間」にまつわる歴史的・哲学的な問題に根差しており、さらにそのことは人種にまつわる歴史的・哲学的な問題に根差しているからだ。しかし西洋的なテクノロジーが、レヴィがあまりに安易に論拠とする比喻、特に機械と奴隷の間の比喻に常に呪われてきたことは特筆すべきだろう。それはある種の体現への意志の産物であり、近代よりもずっと古くからの、しかし産業革命と所有物としての奴隷制の文脈で文化的・物質的に実を結んだのである。未来を作りあげるのだ、という意志、それは肉体と労働に依拠しながら肉体と労働からの脱出を約束し、我々の過去の問題の中にテクノロジーをからめとる。そのために人種、性、そして生殖に関するメタファーが、未来を想像したり創造するにあたっての物質的な問題について我々をがんじがらめにするのである。

しかし最近、様々な不安や議論の焦点となっているのはアルゴリズム、機械学習、ニューラルネットワークであり、またその身近な社会的プレゼンスと文化的なパワーである。擬人化といった以前のようなテクノロジーに対する不安から少し距離を置きつつも、我々が

現時点で着目するのは、まさにこの人間と機械とのレガシーに関わり、また修正を加えるための倫理的領域である。問題は例えば、いままで誰も予期しなかったような純粋な発明の場で定期的に起きている一ヴァーチャルな社交の空間におけるいわゆる女性蔑視的なチャットボット、人種差別的な顔認証システム、ニューラルネットワーク上の偏見的なアルゴリズム、全面的なオートメーション導入前のロボットの権利の要求、あるいは偏見的と言われてしまうほどに人間的な AI の影などである。

もしこれらの事象がまだ抽象的と感じられるのであれば、ジェンダー、セックス、力の面で複雑な様相を見せている新興の領域で市場であるところのセックス／コンパニオンロボットの分野はどうだろう。それはもちろん特にセックスや結婚を含む親密的な領域に関わる多くの社会的政治的問題をはらみ、否応なくより大きな、ある種の文化的な精算をもたらすのは間違いないだろう。そのことはある日突然、コンピューターサイエンスやロボット工学など、従来は人種、セックス、偏見や文化的なセンシティブィティとは特に関係もなくむしろ疎遠な領域が、数多くの SF 小説のサブテキストを担ってきた処々の課題に対し全く対処できないことが判明することを意

味する。その課題とは、黒人、ポスト植民地主義、フェミニズムの問題のレンズを通した時に最も本質が見えるようなものなのである。例えば、合成的な肉体をつくるとすれば、歴史的あるいは慣例的に、従来我々が異なる肉体をどう扱い、どう理解し、どう分類してきたかを検証せずしてどうするのか？合成的な知能を理解する上で、差別的な理解と格差の理解に関する過去のレガシーのやっかいな問題を避けて通ることができるだろうか？客体を主体として、モノを人間とするのに人種、性、欲望の果たす役割とは何か？といった問題である。これは以前にもあった問題なのだ。

人間らしさと機械の自律性

機械学習が、我々の言葉遣いや表現のパターン、特に我々自身が無自覚であったり、あるいは不適切とは言葉には出さないものの自覚しているような、かすかな特徴をとらえて増幅することは知られている。言い換えれば、機械は我々が躊躇するような点、我々の秘密を理解してしまうということだ。我々はもうすでに長い間、人種差別とはちょっとした息遣い、ある種の躊躇、場合によっては特定の肉体や思いがけない欲望に対するほとんど認識できないような反応

といった類のものであることを理解している。このようにしてテクノロジーは我々が過去について何を認識することを拒否するのかを学ぶのである。あからさまな偏見ではなく、むしろ我々の沈黙や否定、肌や息遣いのかすかな兆候が再現され、反映されて拡大されたもの以上に、偏見についてのより大きな証拠があるだろうか？我々がテクノロジーのシステム上に罪悪感をプログラミングして反応を制御したり自制させる方法を編み出さないかぎり、テクノロジーは我々自身よりはるかにそのような情報に対し今後も正直であり続けるだろう。

このような問題は純粋に抽象的で、個人的倫理や性的倒錯の領域の話と思われがちだが、業界の大物たちであるマイクロソフト、アマゾン、また今やディープマインド エシックス アンド ソサイエティー[DeepMind Ethics and Society]社を傘下におくグーグル、そして IEEE [Institute of Electrical and Electronics Engineers: アイ・トリプル E 社]などの強力なグループなどが、テクノロジーの発展への関心に合わせて予備的・先取的な倫理基準の問題に正式に取り組みはじめた。それはいわゆる「抑圧のアルゴリズム」[algorithms of oppression]または「数学的破壊兵器」[weapons of math

destruction]といった、テクノロジーがいかに人間の弱点に対して弱い
かを示す事象への対策である。⁵そして人間がものごとを差別する
傾向を通じ、機械やアルゴリズムが人間との類似点を示し始めた矢
先に、欧州議会ではそれを制御するための明確な規制法を検討し始
めた。興味深いことに、検討されはじめた法律とは、デザインの変
更や、先入観に対する理解や偏見を許さないというコミットメント
を備えたパラメーターのプログラミング、あるいはテクノロジー文
化の転換などに集中しているのではない。そうではなく、全面的な
人間性のかわりに、これらのテクノロジーに明確な「電子的な人間
らしさ」の型を与えようというのが目的なのだ。例えば、イギリス
のテレサ・メイ首相はイギリスが AI の倫理の世界的リーダーとなる
べきだと表明している。

このような「人間らしさ」が一体何を意味するのか、それが焦点と
するのがアルゴリズム的な意思決定上の先入観の危険性と現実性で
あるがゆえ、疑問が残る。電子的な人間が人種差別的、性差別主義
的と考えられる、あるいは差別主義的な振る舞いをした場合、その

⁵ See Safiya Umoja Noble. *Algorithms of Oppression: How Search Engines Reinforce Racism*. New York University Press, 2018; Cathy O'Neill. *Weapons of Math Destruction: How Big Data Increases Inequality and Threatens Democracy*. Broadway Books, 2017.

責任は誰にあるのか？そして倫理とはある一定の相互関係、または相互認識を意味するのではなかったか？

むしろここにおける人間らしさとは、倫理の問題というよりも道義上の降伏なのではないか、という気さえしてくる。先入観についての社会的・政治的、あるいは歴史的な問題に取り組むはずが、昔ながらのイギリスの帝国主義を彷彿とさせるやり方で論点がずらされていくのだ。つまり大西洋地域のアメリカで勃発した脅威に対して政治的な対策として「倫理」を持ち出したいがために、十九世紀になって奴隷制を廃したことである。その目的は人種差別をなくすことではなく、政敵を糾弾するのに利用することにあった。例えば、AI を道義的に制御することへの欧州の関心は、中国が AI の世界的リーダーになることへの決意表明に対して先回りしているだけではないのか、とも考えられる。このように、異なる帝国主義間の昔ながらの押し合いへし合いの力学がみてとれる一かたや臆面もなくテクノロジーを追求し、利潤追求を動機とし、政治的制約が全くない体制、それに対しそしてもう一方は自らの人種問題の歴史を否定し、相手を抑制する手段としては、当たりの軟らかい人権問題による帝国主義的な新手を使うしかない。その新手こそ、西欧諸国が中国の

産業の発展とグローバル化を阻むために使ってきたと中国が長らく訴えてきたものだ。

機械的知能の倫理をめぐるこのようなグローバルな論争を通じ我々が忘れてはならないことは、機械とともにある我々の未来が、このような人間らしさやまた避けることができないその変形にかかっているということだ。それはいわゆる「人間性」が機械に奪われるとか、それが別のものに置き換えることはできない（商品化することはできない）性質のものだといったロマン主義的な考え方とか、擬人化に端を発する、二十世紀の文化や SF 小説を席捲した一種の不安、といった陳腐なたぐいのものではない。ジャマイカの理論家シルヴィア・ウィンター[Sylvia Wynter]の言葉を借りれば、「人間性」が人類のある「種」の人々には激しく制限されていたという事実、また、それを否定するために、形而上学的、文化的そして経済的なシステムが構築されたことをみれば、人間性とはその神話に反して、言葉の意味合いがとても絶対的とはいえないことを意味する。⁶人間らしさがより重要となるのは、特に性的・人種的な観点から、それが「人

⁶ See Sylvia Wynter. "On How We Mistook the Map for the Territory, and Reimprisoned Ourselves in Our Unbearable Wrongness of Being, of Desêtre: Black Studies Toward the Human Project." *A Companion to African-American Studies*, edited by Jane Anna Gordon and Lewis. R. Gordon, Blackwell, 2006, pp. 107–118.

類」よりもはるかにはっきりとした歴史を持つからだ。また分類法としても、より社会的に応用が利き、法的にも変化に対応可能であった。人間らしさを認められる、あるいは将来認められるのは誰なのかまたは何なのかを知るためには、そのことについての歴史をただひもとけばいい。

モノは従うことができるのか？

ここまで述べてきた人間らしさというものが、高資本に依存するロボットや AI を生産する企業が最も嫌がるものである点であることは指摘に値する。密売の嫌疑をかけられかねない恐怖から販売できない商品、あるいは一般的な労働の制限—権利とでも言おうか—なしでは使えない機械をどこの誰が生産しようと思うだろう？いわゆる「性的ロボット」または「コンパニオンロボット」の生産者たちでさえ—そしてレヴィ自身もだが—先回りの倫理的基準、またははっきりと倫理問題を枠組みとし、常に「本物の」女性との対峙する形で計画される抗議活動を考慮せざるを得ない。しかしこれらは機械的人間、あるいは人間に似ている、または人間的な機能を担う機械を生産する者たちが直面する一次的な文化的対立、そして「人

間らしさ」とは何かという問題なのである。

結論からいえば、人間らしさとは資本主義的な社会関係の枠内のみならず、特定的には所有物としての奴隷制度を通じて形成されたものなのだ。曖昧で政治的な問題をはらんだ分類であり、生命のないところに生命を吹き込み、魂のないところに魂を与えるものだ。モノに「生命」または社会的認知を付与し、そのことによって対象に親密性の可能性を含ませるあるいは脅かす—ただよくあるケースとしては、欲望や親密の方がモノに息吹を吹き込んだり、ものに対して社会的認知を促すことが多いのだ。この点について、批評家／詩人のフレッド・モテン[Fred Moten]による「黒人の歴史とは、モノが抵抗できるということ、抵抗するということの証である」といういまや有名な宣言について思いをめぐらさずにはいられない。⁷そして今、モノが従う、合意できる、というのは本当なのか？と問うことはできるのだろうか？

例えばアンジェラ・マリー・ヴォーゲル[Angela Marie Vogel]という、企業（企業的人間）との結婚が2012年にワシントン州で無効とされ

⁷ Fred Moten. *In the Break: The Aesthetics of the Black Radical Tradition*. University of Minnesota Press, 2003, p. 1.

た活動家についてのレヴィの説をとりあげよう。⁸ここでさえ、人間らしさの可能性とそのレガシーの枠組みを考えるにあたって人種が主な争点とされた。州は、「自然的人間」の権利を与えられているにもかかわらず、この「人工的人間」は同意を与えることができないので結婚できない、と主張したのである。

奇妙なことに、この件における同意の欠如に関しては、「当事者」が人工的存在であることとは無関係なのである。真の問題は「新郎」の年齢にあった—つまり、それ／彼／彼女が生まれてひと月半であり、同意できる法的年齢が18歳だからだ。法的年齢の問題はさておき、「人工的人間」の定義が曖昧で、法的戦略としての有効性から考えればより大きな問題が起こるのは明らかだ。ヴォーゲルが法的な主張をしているにせよ、人間がモノ、あるいは有名な例では車、橋や建物（例：エッフェル塔）などと恋に落ちる、あるいは親密性、性的、そして意味のある深い関係をもつといった、いわゆる「対物性愛」やそれと関連する「オブジェクトフィリア」的な性的倒錯の

⁸ See Jake Ellison, Evan Hoover, and Mallory Kannis. "Why King County Nixed Woman's Marriage to a Corporation in Seattle." *KNKX*, July 2012, <https://www.knkx.org/post/why-king-county-nixed-woman-s-marriage-corporation-seattle>.

観点から諸問題が起こる可能性はあるかもしれない。このような問題は「セックス人形」「コンパニオンロボット」の市場の拡大に伴い確かに起き始めていて、法体系へもこのような関係性を認めるような圧力をかけることになるかもしれない。もちろん「人工人間」が同意に必要な法的年齢に達していればの話だ。

レヴィが、もう少しアメリカの歴史と所有物としての奴隷制の歴史を研究すれば、「対物性愛」や混血婚が、実は人間／ロボット間の愛の最初の例でも、または肉体と合成物の混流の合法性を示す最初の例でもない点が明らかになるだろう。両方ともより根源的なものに依拠しており、それは異人種の混血を歴史の中に位置づけ、そのほかの境界線の超越をいずれ不可避のものとする道—つまり「企業的人間らしさ」[corporate personhood]への道—を切り開くものなのだ。反企業主義の活動家で文筆家のウィリアム・P・メイヤーズ[William P. Meyers]の有名な言葉を借りれば、「奴隷制とはある人間が所有物であるという法的なフィクションである。企業的人間らしさとは所有物が人間である、という法的なフィクションである」ということだ。⁹両方の法的フィクションとも出どころは同じだ—アメリカ合衆

⁹ Quoted by Dean Ritz. "Can Corporate Personhood Be Responsible?" *The Debate over*

国憲法修正第 14 条である。

アメリカ合衆国憲法修正第 13 条がアメリカ合衆国の奴隷制を廃止したことを思い出してほしい。1868 年に批准された第 14 条は黒人が合衆国の法律のもとで等しく保護されることを確認し、南北戦争に続いて元は奴隷であった人々に市民としての権利を付与するために確立された。これによってアフリカからの奴隷の子孫からアメリカの市民権を排除した 1857 の悪名高い「ドレッド・スコット」判決を廃止し、黒人男性が参政権を付与されることになる 1870 年の修正第 15 条への一歩となった。内戦後の再興が始まるころ、当時まだ根強く残っていた、黒人が人間としてどこか違う、あるいは足りないという意識、そして何としても人種的なヒエラルキーの保持を求める多くの社会的・文化的勢力—人種をめぐる暴力事件が激増したことを含む—のために、最高裁判所は合衆国憲法修正案第 13 条から 15 条について、これらが「アフリカ系人種の自由、その自由の安全と保全、そして従来彼らを奴隷制のもとに囲ってきた白人の抑圧から保護するため」であると明示したのである。

このような追加条項にも関わらず、1881年にサザン・パシフィック・レイルロード社（Southern Pacific Railroad）が引き起こした人間らしさの意義の拡大解釈という驚くべき事態を最高裁は回避することができなかった。同社はカルフォルニア州における鉄道資産に対する特別税が、具体的に修正第14条に照らして同社に対する差別であると訴えたのである。このことは、人種としてのアイデンティティーの法的保護を、[人間らしさの]「人間」的部分をめぐる解釈の争うことによって、企業のアイデンティティーの問題へと巧みに操作できることを表した。1882年には同社はまた、修正第14条の執筆者たちは「市民」を「人間」と置き換えることによって自然的な人間だけではなく、「人工的な人間」も含むようにした、と姑息にも主張して成功したのである。

人間らしさが公権力による構成概念である、またはそうありうる、という意識は明らかに所有物としての奴隷制の産物であり、修正第14条はそのようなアフリカの人々の根源的な人間性の抹殺を正そうとする試みだった。しかし法の文脈では、自然や歴史の中で見られたそれ以前の許容範囲よりもはるかに「人間らしさ」のありかたが流動的となったのである。このように人間らしさが再定義されること

によって、当初の意図よりもはるかに企業に多くの恩恵をもたらすことになった。なぜなら 1896 年までに最高裁はジム・クロウ法およびそれとは別だが同じ考えに基づく悪名高いプレッシー対ファーガソン裁判を通じて黒人と白人の分離政策が合法化し、その間に企業文化は「人工的な人間らしさ」という同様の法的論理をを使って影響力を深めていったのである。

新種、旧来的な偏見

こうして最後はまた振り出しに戻った。倫理とテクノロジー、人間と機械の関係を歴史化するにあたり、我々は最初のシンギュラリティが批准されたその歴史的瞬間ぴったりの地点に舞い戻る羽目になった。その地点とは、新しい種類の人間を法的に構築することによって、歴史的な悪習（人間性の抹殺）を正すために、人間らしさの指標がまず用いられた。その後そのような規範が流動的であることが判明し、その結果、人間らしさの意義が非有機的、「人工的」な定義へ拡大解釈される方向へと門戸を押し開く。そのことは完全に自律的な、そうでなくとも自律的とわかるような AI への運動に明らかに不可欠であった。しかし人種とテクノロジーの重なり合う長い歴

史と、片方の歴史とその意味するものがもう片方から逃れられない関係性を考えれば、我々が舞い降りたのは、次のシンギュラリティがすでに帰化され、いつの日か正当化されるような未来の地点そのものなのかもしれない。

では、今はどうすればいいのか？

まず大事なものは、人工的な存在そして何らかの人工的知能の形態がほぼ不可避であると認識するにあたり、人種的、性的、文化的な差異によるインパクトを真剣に受け止めることが必要である。シンギュラリティとシンギュラリティの間におけるこのような見地からみれば、そのような存在に対する我々の社会認知と文化的忍耐度はおそらくそれらがいかに「人間」らしくみえるか、あるいは我々に似ているかということと無関係であろうという点は明らかだ。それよりはるかに重要なのは、従属と支配、不安から快樂にいたるまで、数々の他者の歴史を通じて我々がそれらを理解することになるという点だ。デスピナ・カクダキ[Despina Kakoudaki]が言うように、もはや「迫真性」が問題ではない以上、我々がフロイト的な不可思議さが定義した美学的文化的限界をついに越える用意ができたのかも

しれない。¹⁰例えば、あまりにも人間のように見えてしまうロボットはかえって敵対心や疑念といった反応を招きかねないが、あえてキャラクターのような、または誇張された形や明らかに非人間的に成形されたロボットが実際に共感、温かさ、愛情を大いに生み出すことが分かっている。また、作りものの愛情から本物の愛着がわくことも分かっている。その結果、プログラミングされたロボットも、特に子供時代にそれらとふれる機会があった場合は同様のことがいえる。それこそ子供やお年寄りのために作られる「社交的」あるいは「家庭用」ロボットのまさにツボなのである。

繰り返しになるが、機械がどのような外見かということではなく、我々が機械とどのように関わっていくのかより重要である。視覚的あるいは表層的な違いもあるし、また避けることができない機械の不具合さえも個性あるいは文化的相違のようなものと見なしてしまうこともあるだろう。もちろん、アルゴリズムや完全に非擬人的、あるいは非具象的なコンピューター上の話なら、この話は全く意味がなくなる。しかし、社交、力関係、そして親密性といった事象は、我々が知覚や「自由意志」に帰すると考える真の作用が実際に構築

¹⁰ See Despina Kakoudaki. *Anatomy of a Robot: Literature, Cinema, and the Cultural Work of Artificial People*. Rutgers University Press, 2014.

されることがないまま、あるいは認知される可能性がないにも関わらず、やはり起こるのである。「自由意志」または自律性は、我々が社会的、政治的、あるいは性的にどう機械を認識するかとは無縁である。それは、それらが歴史上いかに流動的なものであったか、例えば黒人の例でいえば、自由意志や自律性のないまま、奴隷制のもとで、白人の日々の生活のもっとも親密な空間で機能していたことを考えれば明らかであろう。そして法的な人間らしさが定義された当初、黒人は絶え間なくその「人間性」について問われ続けた。なぜなら、本当のところをいえば、人間らしさとは、白人のみが持つとされた全幅の人間性とずっと区別されるべきものだったからである。

究極的に、ロボットや AI に対する社会的認識とはそれらが人間との関係の中でどう機能するか、また他者に対するむきだしの恐怖心を抑え込むために作られた、共通の相互的な価値観によってそれらがどのように統制されているか、ということがすべてなのである。また親密性が可能な条件を監視する必要があるが、もちろん条件として機械がそれらの価値観を守ることができ、相互性の面での機械の能力が確認されればの話である。いずれにせよ、機械を人間と

しないまでも人間らしいものとするとする文化的、法的プロセスの上で、人種はこれからも決定的な要因となるであろう。なぜならば、機械／人間の関係をめぐる倫理の追求とテクノロジーに倫理的マトリックスを教え込む、あるいはプログラミングしようという意志は、ここで論じた歴史を拠り所とするのだ。この歴史は我々のメタファーの道しるべとなり、どう表現するべきかという規定につきまとうことになるが、今後もそうあるべきなのだ。なぜならば、それは種族と種族、あるいは人間とモノとの格差の問題として歴史的には考えられ、法的に制定されてきたような、あまりにも徹底的な違いの上に構築される関係性をどう考えることができるか、という問題の素地となるからだ。

奴隷制、移民、またそれに付随する不安の歴史的なサブリミナル化が、究極的には AI との公的な関係についての倫理を形成しようという現代の試みに結び付いた以上、前回のシンギュラリティとそのレガシーを真摯に受け止めることによって、そのような存在に対してどう接すればいいのかという条件が立ち上がってくることだろう。異人種間混合からサイバネティックス、そして移民から同化、および公民権運動にいたるまでの動きなどがその対象となる。SF 小説は

実際、我々の「他者」との歴史上の関係性の変化を拒絶そのものこそ、陳腐ではあるが息の長い「ロボットの逆襲」／機械の台頭のナラティブがそもそもインスパイアされる要因となることを我々に教えてくれる。つまり、前回のシンギュラリティの性質とそのインパクトの長さ、そしてこだまのように戻ってくるそのトラウマが生命そのもののコンセプトに恒久的に影を落とすことを考えれば、機械の知能と人工的な生命は、文化的な他者に対する今までの歴史をはっきりと拠り所とするだろう—少なくとも人間らしさの問題について、そして最大では市民権とそれに関する絶え間のない相互的要求の問題について。